

地域文化を深く知る

西日本文化

CSN
Cultural Story of Nishinohon

No 494
2020-4

一般財団法人 西日本文化協会

熊本城に見る清正の築造力
—— 復活公開を前に読み解く
「八幡製鉄所」が消えた!?



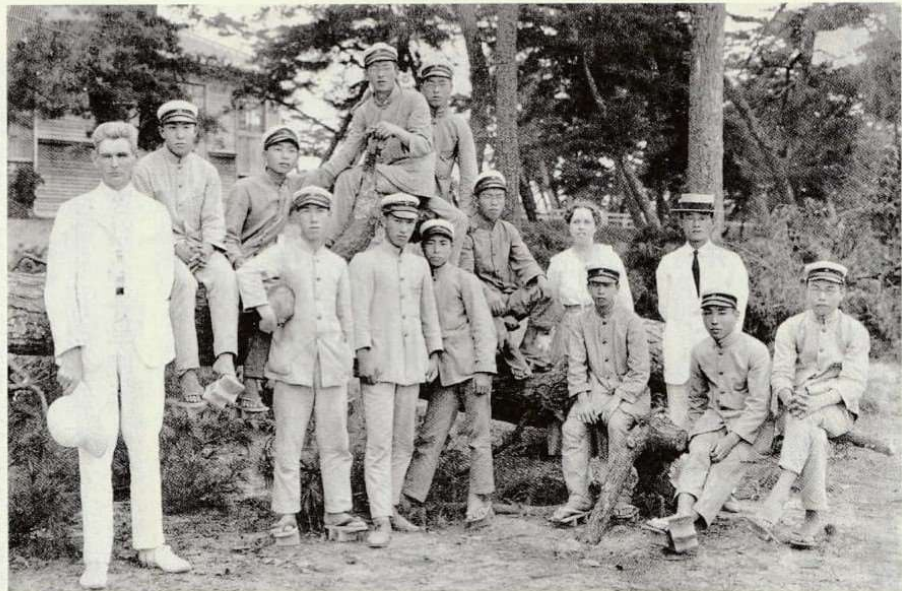
西南学院グリークラブの100年

Hats off to the past, Coats off to the future
(過去に敬意を表し、未来に向かって努力しよう)

黒江量二

ボールデン先生を囲んで(グリークラブ最初のメンバー)

- * 後列右端：水町義夫(グリークラブ創立者、初代部長。のちに西南学院第4代院長。西南学院校歌の作詞者)
- * 水町氏の隣：ミス S.F. フルジウム(グリークラブ指導者、宣教師、英語・音楽の教師。第4代舞鶴幼稚園園長)
- * 前列左端：G.W. ボールデン(宣教師、グリークラブ顧問、のちに西南学院第3代院長)



一九一九(大正八)年の誕生以来、戦前、戦中、戦後と激動の時代をひたむきに歌い続け、ファンのみなさんに応援をいただいていた西南学院グリークラブは、おかげさまで二〇一九(令和元)年一〇〇歳を迎えることとなった。一〇〇年の間にご指導いただいた

諸先生方並びに友好団体のみなさま、ご支援いただいたみなさまにあらためて感謝申し上げますとともに、その軌跡を辿ってみました。

一九一九年から一九四四年

当初は学院のチャペルサービスを行うため「歌」好きの生徒十数人が宣教師ミス・フルジウムの下に集まったといわれている。器楽部と活動を共にしていたが、昭和に入り器楽部は音楽部、合唱部はグリークラブとして独立した存在となり、一九三四(昭和九)年には第一回定期演奏会を開催するまでになる。しかし、世の中の機運は軍国調の色彩が濃くなり、生徒動員が発令された一九四三(昭和十八)年の第九回定期演奏会「涙のコンサート」をもって、その活動を中断せざるを得なくなる。

その「涙のコンサート」について「四〇周年記念誌」は次のように語っている。

西日本新聞社後援による学院音楽部第九回定期演奏会は(昭和十八年)七月十日、学院講堂に於いて開催された。音楽部長笹森教授の開会の辞に次いで国民儀礼あり。前線の勇士を偲んで一同「海ゆかば」を斉唱、プログラムに入る。定刻前、既に堂に溢れた入場者の傾聴裡に、清新な曲目による合唱、マンドリン合奏、ピアノ独奏等多

彩なる五線譜の律動が繰り広げられ、戦時下日本学生の文化を遺憾なく発揮した。

演奏はまず、松隈君のタクトによるマンドリン合奏「東洋舞曲」に始まり、次いで井上君の指揮により、近來とみに内容充実し、澁刺たる声楽部の合唱あり、マンドリン四重奏男声四重唱と曲目は進められた。続いて水町院長以下諸教授、先輩諸氏よりなる合唱団の「昼の海」「野バラ」の美しい旋律には満場万雷の拍手を以て称讃を送り、西南女学院吉田女史のピアノ独奏、リストの「ハンガリア狂想曲第十一番」には聴衆一同唯肅然、鍵盤上を走る巧妙なる手の動きに全く魅了され、愈々今演奏会の華、声楽部全員によるグノーの歌劇「ファウスト」よりの抜萃「兵士の合唱」の力強い旋律は一同を興奮に巻き込み、暫しの拍手鳴り止まず、追加された曲目チェコスロバキヤ軍歌「戦線へ」には又も絶讃の拍手が送られ、斯くして十時近く非常なる好況裡に幕を閉じた。

声楽部の「兵士の合唱」は素晴らしい出末栄えであった。この演奏会は、卒業生にとつては最後であっても、グリーにとつて、戦後再開されるまで誰が最後の演奏会となることを予想したであろうか。演奏会が済むと、誰いうともなく、日頃練習していたピアノの周りに集まり、あれこれ

と歌い出し、最後に「兵士の合唱」を歌った。これが済むと卒業生達は互いに手をつり合つて、涙を流しながら、いつの日にか再び「兵士の合唱」を歌いたいものどかいろいろと語り合つた。会場を出た後も彼らは「ウ・ボー」や「いくさびとよ」(*)などを歌いながら、西新から天神まで歩いて行つた。この後、劇や演奏会等の上演は一切禁止され、グリーも演奏会を開くことが出来なくなり、グリーの活動はこの演奏会を最後に停止してしまつた。

グリーからも、戦争が敗色濃くなるにつれ戦線へと召集され、再び帰ることの出来なかつた人々が多くあり、霊やすらかなれと祈るばかりである。

*「いざ起て いくさびとよ」

ドイツの賛美歌が原曲。現在、わが国の合唱団で歌われているリズムミカルな曲は、アメリカのゴスペル作曲家マク・グラナンによるものである。日本では太平洋戦争前から同志社大学や関西学院大学で歌われていたが、昭和十五年には英語禁止、昭和十八年には米英音楽演奏禁止政策が施行され歌えなくなつた。しかし西南学院では、英文科教授でグリークラブの部長でもあつた藤井泰一郎氏が当時の状況下で言葉を選びながら日本語に訳し戦争中も歌い続けてきた。今では定番曲として全国で愛唱されているが、氏の日本語訳がなかつたなら戦争の混乱の中で永久に忘れ去られていたであろう。(西南学院グリークラブOB会のHP)

一九四五年から一九六八年

出征先から復員してきた部員も加えクラブは再興されるが、瓦礫と焦土の街での復活活動のたいへんさは想像に難くない。幸いにも筑豊の地に疎開をしていた石丸寛氏から指導を受けるようになり、一九四七年、朝日合唱コンクールに初出場初優勝し、戦後の復活を果たす。その後、大学の部が独立した「全日本合唱コンクール」に通算一八回出場、西部地区では一六回優勝、全国大会においても三位以内の入賞五回という輝かしい成績を取めた。それ以降は一九六八年をもってコンクール出場を止め、独自の演奏活動に力を注ぐようになる。一九五四年には、OBで結成された男声合唱団「西南シャントウール」が誕生し現在に至っている。

指揮のほか作曲、編曲、絵画と多才ぶりを発揮した石丸寛氏は、西南グリーの戦後復活の立役者でもある。一九九四年秋、腸にポリプが見つかり癌と判明したあともタクトを振り続け、同行行われた西南シャントウール創立四〇周年記念演奏会でも、「シユールト」と「黒人霊歌」を指揮、一九九八年三月二十三日昇天された、享年七十六。次のメッセージは一九五九年、西南学院グリークラブ

の創立四〇周年記念演奏会プログラムに同氏が寄せたものの転載である。

拍手とともに

ひとくちに四十年と言っても私の生まれた頃からだと思つと、心からおめでとを言わずにはおれません。このながい間、関西の同志社グリーククラブや関西学院グリーククラブと共に、九州の西南学院グリーククラブは立派な活動をつづけてきたことで知られています。

私も戦後の荒廃した中で、たまたま福岡に住んでいたおかげで西南グリーのイガグリ頭の学生さんでスタートした次第でした。旧校舎のレンガづくりの講堂で毎日のように陽が暮れて楽譜が見えなくなるまで練習しました。当時のグリーメン達は夜になるとなんとなく私の下宿に集つていろいろと音楽談義に花を咲かせ、夜道を「菩提樹」を歌いながら帰って行きました。日一日とグリーメンらしく成長してゆく若々しい学生たちを見てみると、しみじみと幸福を感じ、私は寒い下宿の一部屋で睡れないこともありました。

音楽というものは、よく考えてみると何ものにも換えがたい不思議な宝です。それはダイヤモンドや大邸宅のように或種の人たちだけが持てるのではなく、誰でも……全く誰でも自由に持てるのです。私た

ちの心の中にそれがしのび込んでくる時、またそれが一ぱいに心の中に溢れる時、こんなに美しい宝を持ち得る人間ということに深い感謝をささげたくになります。職業としての音楽家もアマチュアの音楽家も、或いは又、自分では何もしないで聴くだけの趣味の人も、交響曲からシャンソンや口カビリーにいたるまで、音楽によってどれだけ慰められ、豊かになり、生命力を得ているか、はかり知れないものがあります。

西南グリーククラブはそのような音楽の美にあこがれる人のながい歴史と伝統を持つている立派な団体です。これはいつまでも伸ばしてゆかねばなりません。つまり金ボタンの制服を着ている間だけの音楽であつては意味がないのです。その意味から古い大先輩も含めての今回の四十年記念演奏会に私は心から拍手を送りたいのです。おめでとうございます。

西南シャントウール

一九五四年、卒業しても歌を続けようとOB合唱団を作ることになり、内海敬三（指揮者）と乙藤成実（マネージャー）が中心になり、一般の男声合唱団「西南シャントウール」（フランス語で「歌う人」の意）を創設。西部合

唱コンクールに出場し、伝統を誇る福岡合唱団を破り一位、全国大会でも三位に入賞した。二〇一九年には六五周年を迎えたが、その間、志渡澤亨、内海敬三、馬頭経明、徳永和彦、佐藤棟也、毛利正明の指揮で活動を続けている。メンバーも六〇人を超え、アクロス福岡シンフォニーホールでの演奏会は三階まで満席となり、福岡のほかの合唱団には見られない集客力である。創立以来の聴衆という高齢者もいるが、それは六〇年間多くの市民に支えられてきた証左であらう。

一九六九年から二〇〇五年

一九五九年の創立四〇周年記念演奏会で、福永陽一郎氏を客演指揮者に招聘して以来、氏の音楽仲間でもある畑中良輔氏、関屋晋氏にもたびたび客演指揮をお願いした。その中でも、福永陽一郎氏には、亡くなる前年まで、定期演奏会で通算二二回もの熱血指導を受けることになる。一九九〇年二月、六十三歳の若さで逝つた福永陽一郎氏は、一九八九年の西南学院グリーククラブ創立七〇周年記念演奏会プログラムに次のメッセージを残している。

私が、西南学院グリーククラブの定期演奏会を指揮したいつと最初は、創立四〇周年の演奏会だつたと思う。戦後の西南グ

リー再建の恩人である石丸寛氏の指揮が予定されていたのが、ご本人の都合で駄目になり、私にそのオハチが回ってきたという事情であった。

戦争前のことになるが、私は中学生だったのに西南学院（当時、専門学校）グリークラブの定期演奏会に出演したことがある。あれは昭和十七年だったか、演奏会の刺身のツマに、ワンステージピアノ独奏をしたのが最初である。この時、私は初めてギョラというものを貰った。丸善の図書券で五円だった。その当時の五円は大したもので、豪華な表装の「ブラームス伝」等が二冊買えたものである。次の年、西南学院グリークラブの戦前最後の定期演奏会となったコンサートで、私はピアノ伴奏を引き受けた。プログラムの最後を飾ったのが、グノー作曲、歌劇「ファウスト」からの「兵士の合唱」で、歌う者も聴く者もこれが最後だと覚悟しての、涙、涙のステージであった。

戦争に負けて、グリークラブの面々も何人か欠けてはいたが、ぼつぼつ帰郷してきて、何となく講堂（現・高校講堂）に集まった十人。細々と声を上げていたのを、自身も帰郷途中の石丸寛氏が聞き留めて、二階への階段を昇った。これが西南グリーの復活物語である。

東京で音楽の勉強をしていた私が、事情

あって家のある福岡へ帰ったのが、昭和二十三年だったか。西南学院大学の神学部に入編され、本式に大学生になって、晴れて憧れのグリークラブの団員になった。約一年間のことで、しかも歌うよりピアノ伴奏をさせられる方が多かったが、このこと（史実？）のお蔭で、今も西南学院グリークラブの先輩の扱いを受けている。

創立四〇周年から創立七〇周年まで、考えてみると私の半生は、西南学院グリークラブと共にあった。そういうことになる。中学時代を過ごした福岡に、母も亡くなり姉も移住して、もう我が家は無くなってしまった。帰るといふ言葉も虚しいようなものだが、毎年、西南学院グリークラブの定期演奏会のために福岡に行くチャンスを与えられて、今でも帰郷という気持ちで出かけてくる。「ふるさと」がある、という事実を与えてくれる西南学院グリークラブに、改めて礼を言いたい。

一九六九年には五〇周年記念として初めての関西・関東公演を行っている。一九九〇年代には一〇〇人を超える部員を擁し、定期演奏会はもとより、関西学院や同志社大学グリークラブとの交歓演奏会、国内各地での演奏旅行のほか、六回にわたるアメリカ演奏旅行・ヨーロッパカンタータへの出演・韓国演

奏旅行などを通して国際親善にも貢献している。

二〇〇〇年代初めより、大学男声合唱団の全国的な傾向とはいえ、西南グリーも徐々に部員が減少し、二〇〇六年にはついに部員がゼロ人。創部以来最大の危機に直面する。

第一回 アメリカ演奏旅行

部創立六〇周年と西南学院創立者のC・K・ドージャーの生誕一〇〇年を記念して、一九七四年二月二十八日から三月五日まで米国を演奏旅行した。古川暢朗部長ら団員四人の大部分。九州の大学から初の海外演奏旅行だった。

演奏旅行では、日本の唱歌合唱曲、ドイツのミサ曲・賛美歌、日本民謡の四ステージを披露した。

ロサンゼルス近郊のガーデン市のコンサートには、西南同窓会ロサンゼルス支部の協力で日系人が多数集まった。演奏後の夕食会の席上、現地のグリーOBにソロを頼んで合唱した。夕やけ小やけは、世代を超えて心にしみた。

二〇〇〇六年から今日

一九五四年竣工以来、西南グリーの練習場

として悲しみの時も喜びの時も共に歌声を響かせてきた、大学のランキンチャペル建設のため解体されることになった。それに伴い開催された「ありがとうランキン・チャペル」の催しに全国各地からOB約二五〇人が参集し、学生時代に戻って西南サウンドを学内に響かせた。この演奏会を機会に一九五四年の創部以来、西南グリー成長の大きな牽引力となってきたOB合唱団「西南シャントウール」に続き、若い世代の「西南グリー東京OB合唱団」と「西南グリーOBシンガーズ」が誕生する。これらがクラブ再興運動への大きな弾みになった。

二〇〇八年、待望の新人部員五人が入部し、復活グリーとしての活動がスタートした。二〇〇九年に行われた創立九〇周年記念フェスティバルには、OB参加者二五〇人と一緒にニューグリーメン六人も晴れてステージに立った。二〇一一年には二〇〇六年以来中断していた定期演奏会（第六四回）が開催され現在に至っている。

まだまだ満足できる部員数ではないが、歌好きの若者たちが次の一〇〇年に向けて力強く始動しており、OBたちの生きがいにもなっている。

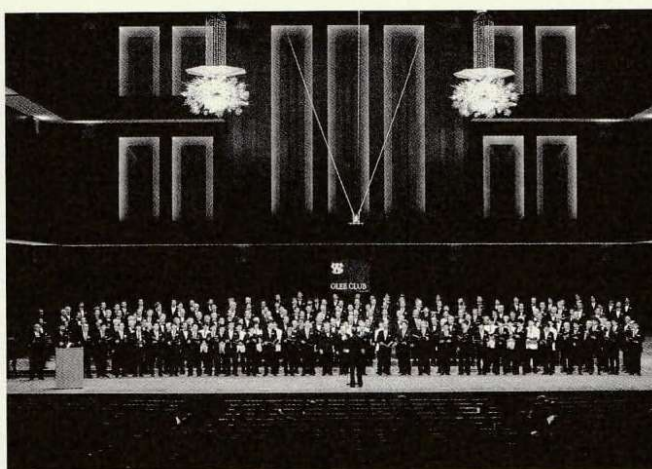
一〇〇周年記念フェスティバル

二〇一九年九月二十二日（日）アクロス福岡シンフォニーホールで、第一部は西南シャントウール第四二回定期演奏会、第二部は西南学院グリークラブ・フェスティバル、と二部構成の演奏会が開催された。客演指揮者には、永年にわたり熱血指導をいただいた福永陽一郎氏のお孫さんになる小久保大輔氏を招聘した。

西南シャントウールの定期演奏会では、グノー作曲の「第二ミサ」と多田武彦作曲の「富士山」を同氏の指揮で熱唱した。

グリークラブ・フェスティバルでは、九十歳超OBから十八歳の現役学生までが六つのグループに分かれアカペラの競演を行った。選曲や演奏スタイルに世代ごとの特徴が現れ、時代が垣間見えた。そして最後の合同演奏では、台風17号の接近にもかかわらずご来場いただいた多くのお客様に感謝し、再び小久保氏の指揮で清水脩作曲「月光とピエロ」を歌い上げた。

フィナーレは先の戦争中、学業半ばで出征し再び歌うことを願いながらも戦死した諸先輩方に敬意を表し、西南グリーが発祥の定番曲「いざ起て いくさびとよ」と「西南学院校歌」を、西南シャントウール名誉指揮者



100周年記念フェスティバルで「西南学院校歌」を歌う西南学院グリークラブと西南学院グリークラブOB会のメンバー

内海敬三のタクトに合わせて二三〇人が思いを込めて歌った。

Hats off to the past. Coats off to the future
(過去に敬意を表し 未来に向かって努力しよう) をスローガンに掲げ取り組んできた記念フェスティバルはここに幕を閉じた。

西南学院グリークラブの飛躍を全員で祈りながら。

くろえ りょうじ・西南学院グリークラブ
OB会 西南シャントウール会長